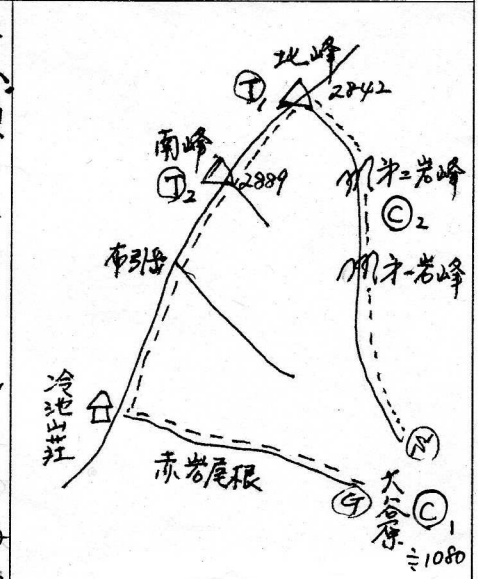


山名	鹿島槍ヶ岳東尾根		報告者	後藤歌子					
この山のセールスポイント	秋の岩稜と登る (10月8日～10月10日)								
コース及びタイム	10月8日	長泉町 16:30 — 富士インター — 14:00 — 甲府南IC —							
	天候 (晴)	豊科インター — 16:30 — 大谷原 17:45							
標高差	△S ~ T = m	体力度	1	2	3	4	5	6	
	▽T ~ G = m	技術度	1	2	3	4	5	6	
走行距離	下士狩 ~ 大谷原 = 250 km		展望度	1	2	3	4	5	6

参加者役割割	CL	後藤隆徳	52	食料	高田八千代	62		
	SL	加藤香子	50	%記録	合計	後藤歌子	55	%記録
	気象	小田知典	50	11%コンで長野気象情報%記録				
	歩	坂合善義	50	長野方面道路情報				
	整備	山本正昭	50	山のトイレ研究				

第一日目
 少汗は比較的良い天気=恵まれ長泉町を去拝
 けるが元気の人の声か消えないとなくたかましい
 でも富士インターで顔を見て安心した。ここで全員
 揃っての出発である。前の座席の人達は山の話に
 無中になっているようであったが、後の座席の人
 はうとうと、始める。話し声が子守歌になり、いつの
 間にも寝てしまったようである。気が付けば中央
 高速を走っていた。すまじ常念岳のA隊から
 連絡が入り「入岳サービスエリアにいますので
 心隊 近くにいるなら待っています」と言うことで
 合流することになった。皆、和気藹々としたの
 休憩を取る。互いの無事を楽しい登山か出来
 ことと願いなからそれぞれの目的地へと向った
 私達も豊科インターから大町市へと車走させた。途中、大町温泉郷では屋根の
 型の変った大きな家が目についた。今ではあまり見ることの出来なくなった茅葺屋根
 と外板葺の団、しているようである。又紅葉もまた見らぬが、今年はずいぶん
 気象と言え暑い日が続いたためか、木の葉が、赤も黄色にもなり前に茶色になり先に
 散らばるようです。奇麗な紅葉はともかくでも見られないのでは無いでしょうか！
 予定よりも早く今日の目的地である大谷原に着くことが出来た。予ての平地でも



あるか、すかかに山である辺りすくに暗くなって来たので、皆、ヘッドランプを着けすくすく
 ティーを張る人、夕食の準備に掛かる人とやる事か、テキパキと早いすかかである。私
 はただおろろろしているだけであった。也かて準備もおま、いよいよ楽しかたにしていた
 スキヤキパーティー(?)の始まりである。ビールで乾杯、-----不疲山人にして?-----
 皆で食べる食事はとても美味しい「アッ」という声になくなってしまふ程の食欲には驚
 いた。これだけ食べるのだから明日からの登山は「グイグイ」である確信が来た。
 飲んだり食べたりと、又おしゃべりにと、皆無中になり時間の過ぎるのも早く感じらる程
 に楽しい一時であった。ふと思ふ、今回の山行は、B隊なのだと、自分からC隊
 に参加している事も忘れていた。何も考えずに言わゆるままに参加したように
 ある。不安でもある。明日からの行程がどんな事になるのか、又、どんな試練
 が待っているのか? 昔いろいろと頭中を過る。でも皆に迷惑を掛けるかもしない
 いかとにかく頑張るしかない。後で「本当に良かった、楽しい登山が出来たよ」と
 言えるように心掛けたい。「明日、天気はなあい」と祈る。
 藪か、河んだ! 岩場か、河んだ! 頑張るゾー コッソヤー!



山行報告書

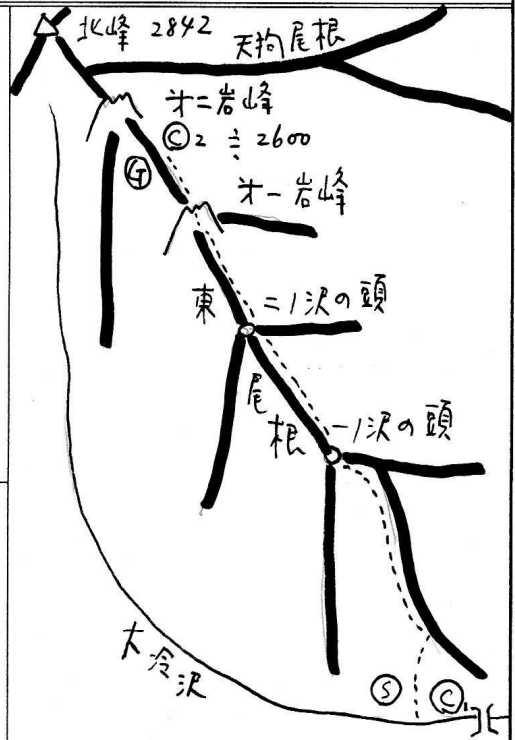
年月日	'99年10月 9日(土曜日)	報告者	加藤 秀子
山名	大谷原～一ノ沢の頭～オ-岩峰～オニ岩峰	天候	晴れ
この山のセールスポイント	1930年 我々の大先輩 冠 松次郎が 辿ったルートを訪ねて・・・		
コース及び タイム	起床 2:00/3:50～(30分のロス) 登り口～第一岩峰の取付き13:00 ～第二岩峰 手前の尾根テン場16:30 標高差 ㊸ ₁ ～㊸ ₂ ≒ 1520m		
体力度・技術度共	1・2・3・4・5・㊸	展望度	1・2・3・4・㊸・6
後藤 隆徳	このルートには、全ての山のエキスが詰まっている。		
小田 知典	ヤセ尾根のなが～い藪こぎ・・・キビシッ!		
山本 正昭	バテて皆に迷惑をかけてしまった。すまない。		
堀合 喜義	枯れ葉踏む足音に秋を感じつつ、進めど終わらない藪こぎに汗が吹き出す。		
高岡八千代	やぶ漕ぎ良かった。岩も良かった。全て良し。		
後藤 歌子	朝早くからの藪こぎと、暑さに参ってしまった。		
加藤 秀子	整備されていないバリエーションルートは野性の香りが漂う。ワァ～オ。楽し!		

第
二
日
目

『あと一息。頑張れ。もうすぐピークだよ。あと一息。頑張ろうよ』とゼーゼー、ハーハー苦しそうな息を吐く山本を叱咤激励し、草付きの岩場のヤセ尾根の急登を一丸となって登る。日は暮れだし辺りに夕闇が迫り始めた。こんな状態の山ちゃんを何処まで引っ張って行けるだろうか。今日は何処へ泊まるんだろう。先に行ったCLはこんな岩場で、テン泊地を探す事は出来たのだろうか。大幅に遅れてしまった行程に限りなく不安が走った。

2時起床。お湯を沸かし各自朝食をとる。テントをたたみ、シートの上で個人装備の重量を計り、それに共同装備をプラスして男性18kg、女性17kgの荷作りとした。然し、個人装備をもう少し徹底的に軽量化すれば、全体的な重量は減っただろう反省が残る。準備体操後、大谷原を出発。大冷沢(柿ヶ谷)左岸に沿った林道を、取付き地点の目印の赤布を探しながら暫く歩くが見つかる事が出来ず、30分のロス後いきなりのやぶ漕ぎが始まった。

東尾根は大谷原から北峰に向かって東南に延びた、標高差1750mの長大な尾根である。1930年8月、冠 松次郎はこの厳しい藪と岩峰の通過に苦しみながらも東尾根の初登攀に成功し足跡を残した。偉大な先輩に頭が下がるとCLに言わせた程の藪は、生半可なものではなかった。急登を四つん這いで草や木を掴んでよじ登り、やっと尾根に辿り着いてホッとしたのも束の間、今度は目の辺りを煩く塞ぐ篠竹(すげ)「ササの一種。わが国各地の山地の斜面



≒
1080
m

に自生。ブナ等の林下に群生し高さ1～3m位」を手で払い、平泳ぎをするような恰好で藪を身体で我武者羅に押して歩く。2番手を歩く歌子と先頭のCLとの差が開き、初めての藪こぎをトップで歩く感じになってしまった歌子は要領を得ず、どんどん差は離れるばかりだ。加トーがトップに出、後ろを引っ張る形をとった。篠竹の藪払いで顔面や手首は引っ掻き傷が絶え間なく、『何これ～！ヤダ～！』と歌子が先ず悲鳴を上げた。

篠竹の藪払い、ヤセ尾根の這松登りと格闘し、いつの間にか一ノ沢ノ頭に出た。明るく開けた気持ちの良いピークは、秋の色が濃く草紅葉が素晴らしい。只ガスが立ち込め展望が出来ないのが残念だった。この頃から山本・歌子の2人がバテ始め、山本は水を必要以上に欲しがり共同の水2ℓだけは手をつけるなどCLにきつく言われた。歌子の共同装備をCLと加トーで振り分け、再び行動開始。次のピークで歌子の水2ℓを加トーが背負う。ザックの重量が21kgは重かった。只ひたすら登ると、両手で木や草を掴んで身体を持ち上げながら登るのでは同じ重量でも肩の食い込み方が違う。足が遅いと、其だけ重みがこたえた。CLと交替し先を行かせて貰う。心の中で『クッソー！負けてたまるか』と反復しながら必死で登った。

ヤセ尾根の岩稜を越え、それとなく踏み跡らしき道を辿りながら、やっぱり物好きがいるんだなと嬉しくて意味もなく笑ってしまう。目前に大きな屏風のような岩壁が見えた。取っ付きの手前で皆を待つ。足は棒の様だ。漸く到着した一行は、汗を吹き出し息をゼーゼー喘がせ、山本は唇が渇き切って苦しそうだ。着くと同時にバタンと引っ繰り返り寝てしまった。続いて小田・歌子も苦しそうな表情で横になる。堀合・高岡も『つらいよ』とは言いながらも元気で有難い。山本を見ながらCLに、この状態では岩峰を乗り越えて行くのは無理ではないかと尋ねると、テン泊地がなければヘッドランプをつけてでも行くしかないなどの返事であった。皆固く目を閉じたまま無言である。暫く休んだ後、出発する。

岩壁は直下の基部を左にトラバース。際どいザレ場を慎重に登り岩場を乗り越えて行った。『少し待って・・・』『もう駄目だ』と苦しそうな喘ぎ声が後から聞こえてくる度、胸が痛む。雪があればナイフリッジであろうヤセ尾根を、木の根につまづかないよう慎重に足を運ぶ。高度感が更に増し、尾根が行き詰まった第1岩峰の手前でCLが待っていた。見事な岩の要塞である。加トーの確保でCLがトップで登る。途中ハングした場所がある為、ザックは置いて空身で登り、その後で加トーが背負いあげた。そして一旦、下降して歌子をあげる。

現場で初めてのクライミングに、緊張度が最高に達した歌子は、途中で岩にしがみつき『怖い！登れない。落ちる』と嗚咽しながら泣き出した。『泣く暇があったら足を上げて登るんだよ。左足はそこ！右足はこっち！手はそこ！』きつい言葉に、必死で手足を動かし『登れないよ。怖いよ』と終始言いながらも見事クリアーした。尾根からすればワンピッチ5～6m位の高さのものだが、両端下は絶壁になっている。高度感は凄いものだ。本当に恐かったのだろうと思う。その上も急な岩盤が続く為、加トーが登り歌子を安全圏内へと導いた。その間に小田が登り、山本が続くが足がいかまっていたせいか、4回位登り返してダウンしたようだ。CLから上で待つ加トーに呼出がかかり、下迄降りていくと堀合が山本の荷物を背負って登ってく



る所だった。そしてザックを降ろすと基部まで下り、空身の山本をあげる。山本の荷物は途中まで加トーが背負い、歌子が待つ場所で全員合流した所で岩峰を乗り越えた。

テン泊地を探す為に先を急ぐCLの後を引き継ぐ。時計は既に午後4時を回っていた。岩場を登るのに体力を使い果たした歌子・山本は『ゆっくり、急がない』と自分自身に言い聞かせながらも喘ぎ続ける。休ませてやりたいが、休めばどンドン日が暮れる。テン泊地があるかどうか分からないだけに遅くなるのは危険だ。『ゆっくりでもいいから休まない。足は前に出す。さぁ〜行こうよ』心を鬼にしてはっぱをかけた。

然し、とうとう山本は『休ませてくれ〜』とバタンと仰向けに倒れ込み寝てしまった。腹は波打ち、顔は苦しきで歪み、見ている方も辛かった。腹を決め暫く休ませた。『男なら頑張れ』叱咤激励して歩かせようとするが、『此処で泊まる。置いていってくれ』と喉から声を絞り出し、とうとう共同の水2ℓに手をつけた。『もう怒られてもいい。怒られてもいいんだ』ボソボソ呟きながら水を飲む山本に、『その水は山ちゃん一人のものではないんだよ。足りなくなれば皆の死活問題につながるんだよ。』と出かかった言葉も飲み込み、水を飲めば活力が出て歩いてくれるかとただ黙って見ていた。この時の山本の姿は何故か私の目に焼きついて離れない。強烈な印象となって残った。

歌子が、あまり休むと疲れるから先に行きたいと言うのを止め、やっと歩きはじめた山本をラストを守る堀合に頼み、ゆっくりと登り始めた。急登の斜面から稜線につめ、右側はストーンと切れた絶壁だ。その向こうに先程通った東尾根が延々と延びている。一足登っては休む山本に、堀合に任せて先を行こうと言う者もいたが、こんな状態の山本を堀合一人では大変だから、あくまでも団子で行くと決める。とにかく歩いてくれる事が先決と、皆で山本の荷を分ける事にした。高岡が、小田が、堀合が、喘いで歩く歌子まで荷物を持ってくれるという。皆自分の荷物が重くて辛いのに、その気持ち嬉しかった。そして後ろでいいと固執する山本を強引に歌子の後の3番手に付けて歩く。

暫く歩くうち、少しずつ元気を取り戻し始めた山本は、前の歌子を追い始め『せわしない。もう少し離れて』と今度は吐られている。そのやりとりを聞いてやっと安堵した。と、同時に頭の方からCLの声がした。『ヨロレイホ〜。今日は此処で泊まるぞオ〜』。上を見ると、直ぐ上に顔が見えた。『ヤッ タ〜』大歓声があがった。もう少しだ。もう少しだ。

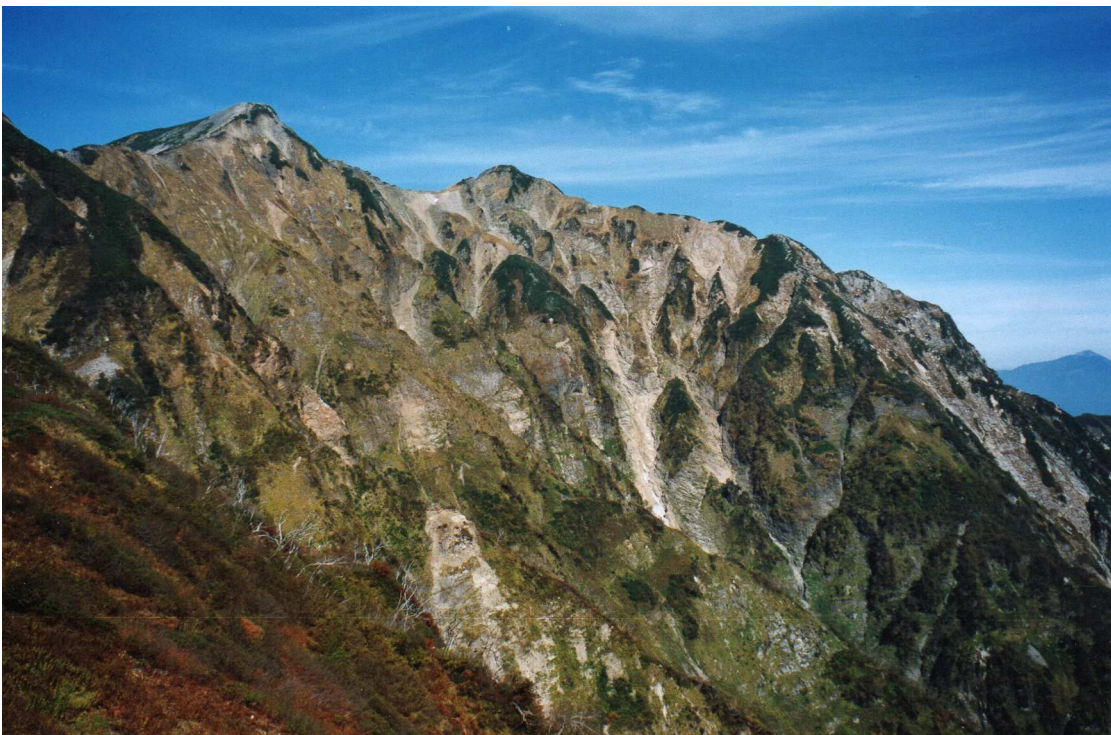
『良く頑張った』と差し出すCLの手を握り返しながら思わず涙が滲んだ。何事もなく皆を此処まで引っ張って来れた安堵と、緊張がほぐれたのとで感無量だった。歌子も高岡も泣いた。辺りは闇の戸張がおりようとしていた。気がついてよく見ると、尾根の続きの眼前に第2岩峰がドーンと立ち塞がっている。私の立っている場所は、尾根の競り上がった4人用のテントが一張りやっとの狭いピークだ。女性は此処より少し下がった、蛇が生卵を飲み込んで喉を膨らませたような細長い場所で、おまけに斜面ときている。寝ぼけて寝返りを打ちようものなら、その儘ゴロンゴロンとテントごと谷底へ落ちていくような、空恐ろしい場所だった。谷側に誰

が寝るか、3人で話し合った結果、誰が寝ても体重が少し重い高岡が、落ちる最中に一番下になってクッション代わりをしてくれるだろうと言う事になって大笑いの渦がまきおこった。

すっかり暗くなった針のむしろのテントの中で、重い思いをして背負い上げた貴重なビールで乾杯！軽量化をはかり、食事は決して豪華とは言い難いが、それでも楽しい夕餉が始まった。鍋から上がる湯気がシュンシュンと音をたて、囲む皆の表情がとてもしゃんといい顔をしている。堀合がテントの入口を開けると、墨色の世界一色に染まった山の向こうに、富士山がくっきりと浮かんで見え、歓声があがった。今宵は大いに山談義に花が咲いた。

いい仲間達だ。思いやりがあって、優しさがあって、厳しい山行の中では特に感じる。CLを筆頭に、気持ちが一つになった山行は何物にもかえがたい。山本は『もう山は止めた』と歩きながらこぼしていたが、夕餉では『体力をもう少しつけて……。岩の訓練も頑張る』と目を輝かせながら言っていた。小田も岩の訓練をやりたいと堀合に相方を頼んでいる。苦しみを乗り越えて、更に訓練を積みたいと言う面々にCLは相好を崩して喜んでいて、貸切りのピークでレイホーテントがはじけた。『ぼたもち3兄弟頑張れ……。』と。

ハードなSLを担うには、未だ未熟な私に皆の暖かい協力で助けて頂きました。有難うございました。山も然りですが、それ以上の掛けがえのない温かい心を、いろんな形でいただいたような感じです。CL・小田ちゃん・山ちゃん・堀さん・高岡さん・歌ちゃん……。最高！！此れからも頑張っていこうね。助け合いながら……。素晴らしい仲間にカンパ〜イ！



山行報告書

年月日	1,999年10月10日(日)	報告者	小田 知典
山名	才二岩峰～北峰～南峰～赤岩尾根	天候	快晴

この山の魅力	第二岩峰、核心部のチムニーも登る		
コース及び タイム	起床4:00～日の出5:40～チムニー直下6:00～第二岩峰登攀終了8:20 ～北峰9:25/9:45～南峰10:15/10:25～冷池山荘11:25/12:00 ～赤岩尾根分岐12:20～西俣出合14:05～大谷原14:50～土狩22:00		
標高差	△ S2, 600～T2, 889≒289m	体力度	1. 2. 3. 4. ⑤. 6
	▼ T2, 889～G1, 080≒1,809m	技術度	1. 2. 3. 4. ⑤. 6
走行距離	下土狩 ～ 大谷原 = 500 Km	展望度	1. 2. 3. 4. 5. ⑥

参加者	CL	後藤 隆徳	冠松次郎に敬意を表します。
	SL	加藤 秀子	朝一番に見た第二岩峰は、超ド迫力！
		高岡八千代	東尾根からの鹿島槍ヶ岳、最高でした。
		後藤 歌子	第二岩峰登れて良かった、北峰、南峰も最高だった。
		堀合 喜義	痩せ尾根上の0.5坪テント場、山の自然を感じる。
		山本 正昭	鹿島槍ヶ岳頂上、360° のパノラマ最高。
		小田 知典	〈喉元過ぎれば熱さを忘れ〉 ハング気味のチムニー楽しかった。

【10月10日】才三日目

どれ程の時間眠ただろうか、。第二岩峰目前の、両面がスパッと切れ落ちたピークにビバークしたテントを、夜中、天狗尾根の方から吹き上げる風が執拗にバタバタと煽っていた。設営は完璧だと自分に言い聞かせ、ウトウトしているうちに夜も白み初め、風も収まり、眼下には雲海が敷き詰められていた。遙かに稜線が見えてきた。ご来光！テントの窓を全開にし「素晴らしい眺めだ！」「お～寒い」「富士山が大きいねエ」「ほら見てよ！槍、穂高が朝焼けでキレイだよ」一日の始まりである。行く手には、第二岩峰が大きく立ちはだかっている。加藤シェフに感謝し、きのこカレーライスを腹一杯食べた。その時、チーフリーダー(CL)である会長が外から戻り、「拭いた紙だけ持ち帰ろうと思ったが、黄金もしっかりしていたので持って来ちゃった」と、紙にくるまれたモノが手のひらで暖かそうだ。「サ～スガー」の一言がなかなか出なかった。

テント撤収し、ハーネスを付け、第二岩峰直下に降りる。正面の壁を直登する方法もあるそうだが、その下をトラバースしてチムニーを登り、その上の壁を登って岩峰上に出る。チムニー(体が入る程割れた岩壁)には、残置ロープがぶら下がっており、このルートを攻めるクライマーのこだわりも感じられる。

フィックスザイルにブルージックでビレイするのではなく、チロリアンノットでビレイをとると云う。皆分からず、チムニー直下まで登っていた会長が降りてきて結びを教わる。ブルージックだとテンションが掛かるとシュリングが溶けてしまうと云う、なるほど、。そこでザイルとシュリングの間にカラビナを入れると、ナイロン同士の摩擦が少なくなるって訳だ。これがチロリアンノットだ。ゲレンデには無い本ちゃんならではの学習が沢山あるのです。

麗峰の皆さんドンドンS山行に参加しましょう。と、講釈はこの位にして本ちゃんに入ろう。

チムニー上部がハング気味の壁を見上げ、皆言葉少ない。加藤がトップで登る、皆一挙手一投足を見守るが、チムニーに入ると見えなくなってしまう。ハングを越え上部の壁を難なく登りザイルをフィックスする。姉御の技術は日進月歩で、山で会うたびに向上している様に思う。

加藤に続くんだと歌子、岩の割れ目に突入した。手掛かりを求めウルウルしてる、会長のアドバイスが飛ぶ、彼女も泣かずに頑張って登り切った。 エライッ！

会長の登りを見ようと思い少し登ると、「岩が狭いから未だ来ちゃダメ」の山ちゃんの声で諦めた。チムニーを登った会長は、山ちゃんの挑戦を見守る。、ホールドを探し途中まで行くが、ワンステップが上がらない、ザックが重そうだ。上から会長が、「残置ロープにカラビナでザックを付けろッ」岩の途中で上手くいかない、「小田ちゃん手を貸せエ」ロープにセットすると、18kg前後のザックを引きずり上げた。山ちゃんもハングを乗り越え登っていった。

「会長ッ、ボクのザックは？」「自分で担いで登って来いッ」上の壁を登って行っちゃった。登るしかないか、ザックのチェストベルトを締め、僅かなホールドを探しまだ冷たい岩をさすらう。必死で登った、驚頭のトレーニングが効いたね。大きなザックを担ぎ、チムニーと上の壁を登り切った時、私は秘かに達成感に浸っていた。 と、その時下から高岡の声がした。ザックを引き上げてくれて事らしい、会長が「小田ちゃん、ハーネスをしてるから行って来て」「ボクの技術じゃ難しいですよ、会長」「しょうがねーなァ」会長はスルスルと降りていき高岡のザックを担いで上がってきた。「お役に立てなくて済みません、近々きっと役立つ男に成ります。」

最後に堀合が、加藤のビレイで豪快に上がってきた。彼は岩を見ると、恋人に会った時のように目尻が下がりニヤニヤしている。好きなんだね、岩がウマイ！

第二岩峰から先、鹿島槍ヶ岳北峰に向かい振り返ると、荒沢側が深く切れ落ちていて急いで前を見るが、右に北壁、左に北俣本谷が切れ落ちたナイフエッジとなり、高度感あふれる冷や汗タラタラのバリエーションルートだった。(;)

北峰には数組のパーティが眺望を楽しんでいて、妙な所から登ってきた私達に不思議そうであった。とにかく素晴らしい天気だ。五竜、唐松、白馬、西には、7月に登った花いっぱい剣岳の姿が大きく、コバルトブルーの広大な日本海をバックに八ツ峰が映えていた。

吊り尾根を隔てた南峰は50m程高く、さらに素晴らしい大展望である。皆で、藪ごぎに泣いた東尾根、第一岩峰、ビバークしたピーク、第二岩峰から北峰と目でトレースし、ここに立っている自分を褒め称えた。

非常に厳しくも、この素晴らしいルートをリードしてくれた会長に心底感謝！そして、会長と共にサポートの眼を向けてくれた加藤にも大感謝である。 <(_)>

南峰から冷池山荘に向かう、大きい爺ヶ岳の遙かに我らが富士山、南アルプス、北ア後立山連峰、日本海、フォッサマグナの山々が全部見える、ぜいたくな眺望だ。

喉をカラカラにして山荘着、つべたいビールが「うまいッ」ラーメン 1/2「うまいッ」至福のひと時である。ボクはまた山に登るんだ！ (^_^)

冷池山荘から大谷原まで4時間30分と書いてあったが、林道まで降りて休憩し、500mlのビールをコッヘルに入れ一人70ml、堀合80mlを頂き、約3時間で下山してしまった。

大町温泉 薬師の湯につかり想う。高岡の優しいまなざしには感じさせない、並はずれた精神力とパワーに何時も感動させられる。ウルルS隊デビュー、仲間の励まし合い、皆よく頑張りました、。素晴らしい仲間！ ナマステ (-_-)

